

モーツァルトのシュトラースブルク協奏曲について (その 2) ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 説の顛末

野口秀夫

1. はじめに

モーツァルトの『シュトラースブルク協奏曲』がヴァイオリン協奏曲 ト長調 K.216 であることを前回の研究会で紹介したが、その結論に至るまではヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 がそれであるとの説が有力な時期があった。今回は各説の由来について振り返ってみたい。一次資料だけでなく、翻訳を含めた二次引用資料も対象としたい。思い込み、無批判な受け売り、間違った引用などが渦巻いていることが分かる。

2. 『シュトラースブルク協奏曲』絞込みの歴史

K.216 に至るまでの『シュトラースブルク協奏曲』絞込みの歴史を辿ってみよう。

2.1 オッター・ヤーンの説 (K.216, K.218, K.219 の何れか)

(1) ヤーンの『モーツァルト伝』初版では K.216 或いは K.218

オッター・ヤーン (Otto Jahn) の『モーツァルト伝 (W.A. Mozart)』初版 (1856 - 59) によれば: 「[モーツァルトのヴァイオリン協奏曲の] 最終楽章は基本的にロンド形式であり、特に中間パッセージへの接続部ではパッセージ全体がそろって拡大されソロパートが特に活躍し、より自由に快活に、形式に拘らなくなる傾向を伴う。テンポや拍子がロンドの途中で変わることも珍しくない。90 [=二長調 K.218] ではアンダンテ・グラツィオーソ 2/4 がアレグロ・マ・ノン・トロポ 6/8 に変わる; しかし滅多にないことにロンドが全く奇妙にも楽章の持つ特徴から離れて中断される (89 [=ト長調 K.216]、90 [=二長調 K.218])。二度ともそれはアンダンテのテンポで 4/4 拍子の大衆的な音楽で表現され、民謡の雰囲気と心地良さを伴ってびっくりさせるような、また楽しげな効果を生む (脚注*: 協奏曲に対し彼が『シュトラースブルク付き』と言っているのはこれらの楽章のひとつがベースとなっていると思われる。しかし詳細は何も分からない)。」^{注1}と述べている。

Der letzte Satz hat regelmäßig die Form des Rondo, wo denn die Solostimme besonders in den verbindenden Mittelsätzen sich freier ergeht; auch ist hier, wo die Stimmung leicht und heiter, die Form locker und lose ist, der Passage mehr Spielraum gegeben. Es ist nicht ungewöhnlich, daß im Rondo Sätze in verschiedenem Tact und Tempo mit einander wechseln, wie 90 ein Andantino grazioso $\frac{3}{4}$ und Allegro ma non troppo $\frac{2}{4}$ alterniren; allein eine weniger häufige Erscheinung ist es, wenn das Rondo durch einen ihm völlig fremden, in sich selbständigen Satz von verschiedenem Charakter unterbrochen wird (89, 90). Beidemal ist dies ein einfaches Andante $\frac{3}{4}$ von so entschieden ausgesprochenem Volkston, daß man annehmen möchte, es sei ein wirkliches Volkslied hier aufgenommen und mit Laune und Behagen dargestellt. Die Wirkung ist überraschend und sehr angenehm ¹¹.

(1) Ich vermute daß die obige Bezeichnung des Concerts „mit dem Straßburger“ sich auf einen solchen Satz gründet, kann aber darüber nichts Näheres nachweisen.

図 1 オッター・ヤーン『モーツァルト伝』初版 第 1 巻 (1856) p.604

89. 1775. André Berg. 172. «Concerto di Violino di Wolfgang Amadeo Mozart Salisburgo li 12 di Settembre 1775» G dur. (mit Quartett 2 Ob. 2 Co.) Drei Sätze.
90. 1775. André Berg. 173. «Concerto per il Violino del Sgr. Cavaliere Amadeo Wolfgang Mozart nel Ottobre 1775 à Salzburgo». D dur. (mit Quartett 2 Ob. 2 Co.) Drei Sätze.

図 2 オッター・ヤーン『モーツァルト伝』初版 第 1 巻 (1856) p.714

つまりト長調 K.216 と二長調 K.218 が候補になると言っているのである。それは楽章を中断して大衆的な民謡調のパッセージが入るからだとしている。但し詳細は不明であると断っている。非常に正直な態度であると思う。該当部分を挙げておこう（ヤーンは 4/4 拍子と言っているが実際はアラ・ブレーヴェである）



図 3 モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 ト長調 K.216 フィナーレ第 252 - 276 小節



図 4 モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 フィナーレ第 126 小節後半 - 第 144 小節

(2) 『モーツァルト全作品目録 IV』ではヤーン初版の K.216 或いは K.218 を引用

『モーツァルト全作品目録 IV』中央公論社（1977）によれば：「ヤーンはモーツァルトの手紙の言い回しから察すると、その協奏曲は民謡と関係があるように思われるとし、実際その例として、K.218 および K.216 の Rond 楽章に民謡との関わりを指摘しており、この 2 曲のいずれかが『シュトラースブルク協奏曲』だろうと述べている。」^{注2}

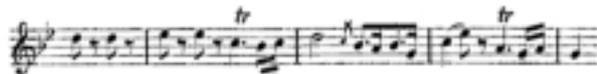
(3) 『モーツァルト全集 第 5 巻』はヤーン説を K.218 として紹介

『モーツァルト全集 第 5 巻』小学館（1991）ではヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 の解説において「オットー・ヤーンはト長調（K.216）の Rond 楽章の民謡ふうなエピソードと同様、シュトラースブルク地方の民謡との間に共通性があると述べている」^{注3}と紹介している。ここで K.216 を候補から落としている点、“シュトラースブルク地方の民謡”としている点はヤーンの引用とは言えず前者は不正確、後者は勇み足である。

(4) ヤーンの改訂版では K.216 或いは K.219 に摩り替り（？）

ヤーンの『モーツァルト伝』改訂版（1867）では初版にないイ長調 K.219 の説明が追加され文章が改訂された：「[モーツァルトのヴァイオリン協奏曲の]最終楽章は決まって Rond 形式であり、ソロパートが自由に演奏する。特に中間パッセージへの接続部ではパッセージ全体がそろって拡大され音楽は軽快で快活になり、形式に拘らなくなる。二長調の協奏曲（218K.）のようにテンポや拍子が Rond の途中で変わることも珍しくない。そこではアンダンテ・グラツィオーソ 2/4 がアレグロ・マ・ノン・トロッポ 6/8 に変わる。ト長調協奏曲（216K.）では

3/8 の快活なパッセージがト短調のアンダンテで中断され



そしてト長調のアレグレットが続き



第 1 主題に戻る。イ長調の協奏曲 (219K.) では主題はテンポ・ディ・メヌエットで、イ短調のアレグロ 2/4 で中断される。



両者において挿入されているパッセージに明確に表現されている大衆的音楽が注意を引き、びっくりさせるような、また楽しい効果を生む。手紙で協奏曲に対してほのめかされている『シュトラースブルク付き』はこれらのパッセージのどれかを指している。“シュトラースブルク舞曲は腕の優美な絡み合わせと身体の繊細な動作によってのみ成立する舞曲であって、通常非常に若いカップルの個々の組によってワルツの輪の中で踊られる(脚注*: カロリーネ・ピヒラー: 画報 (Zeitbilder) p.149)。”^{注4}

分かりにくいのが「両者」と 2 曲を対象にしているのが直近のト長調 K.216 とイ長調 K.219 に『シュトラースブルク付き』の候補が摩り替ってしまったように読める。しかし、K.219 のイ短調のアレグロ 2/4 が「大衆的音楽」と言えるかどうか疑問であり、また改訂時に考えが変わったと言うのもおかしな話である。おそらくヤーン自身が K.219 に関する記述が漏れていることに気付き手を入れた結果、混乱を来たしてしまったのではないだろうか。

(5) ヤーンの英訳版は改訂版を底本に K.216 或いは K.219 (?)

ポーリン・D・タウンゼントの英訳版『Life of Mozart』(1882) はヤーンの改訂版を定本にしている^{注5}。本文は原著の文字通りの翻訳である。

(6) シーダーマイヤーはヤーン改訂版を K.216 或いは K.219 として引用

ルートヴィヒ・シーダーマイヤー (Ludwig Schiedermair) は『モーツァルトと家族の手紙』(1914) でヤーンの伝記第 1 巻の 365 ページを参照し、「ト長調 K.216 或いはイ長調 K.219 のいずれかにシュトラースブルク舞曲が参照される」^{注6}と断定している。初版とも改訂版ともページが合わないが、シーダーマイヤーが改訂版の 324 ページを参照しているのは確実である。

(7) アーベルトの『W.A.モーツァルト』はヤーン改訂版を K.216 或いは K.219 として引用

ヘルマン・アーベルト (Hermann Abert) の『W.A.モーツァルト』(1919/21) は注で「ヤーンは問題の曲が K.216 あるいは K.219 であると信じた」^{注7}と書いている。これもヤーンの改訂版に基づいたものである。

初版と改訂版の比較に言及した文献が見当たらないのは奇妙なことであり、したがって改訂版が無批判のまま引用されてしまっていることも情けないことと思わなければいけない。

2.2 リーベスキントの説 (K.218)

(1) リーベスキントの『音楽ビジネスと保護』における記事

ヨーゼフ・リーベスキント (Josef Liebeskind) は『音楽ビジネスと音楽保護 (Musikhandel und Musikpflege)』(1908, Nr. 1-2) において『シュトラースブルガー付きのモーツァルトの協奏曲 (Mozarts Konzert mit dem Straßburger)』のタイトルで発表した^{注8}。そこで最初に「最近まで『シュトラースブルガー』と命名された作品は認められていなかったが、その特徴からそれを終わりに導くことができる途上にいると言ってよいだろう」とし、カール・ディッター・フォン・ディッター・ドルフの 7 楽章のプログラム・シンフォニー《仮装舞踏会 La Redoute》が第 4 楽章に「シュトラースブルク風舞曲 Ballo Strassburghese」を持っていることを指摘し、こう続けている: 「この作品の特徴から判断するとドイツ語の命名『シュトラースブルガー』は概ねフランス語の『ミュゼット Musette』と同義であると思われる。つまり作品はバグパイブの模倣メロディを取り入れている。」

リーベスキントはヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 の第 3 楽章からミュゼットの主題



を印刷しているが[ここではアーベルトの次項の文献からコピーした] 証拠なしに主張されたディッターズドルフのもう一方は印刷されておらず、次のように締めくくっているのみである：「モーツァルトのヴァイオリン協奏曲全 7 曲の 1 曲からのみ ... そのような部分が発見されたので、この協奏曲が ‘シュトラースブルガー’ であろうと思われる。」

ディッターズドルフの交響曲は 1899 - 1904 年にライプツィヒのゲブリューダー・ライネツケ社から出版され、1971 年にニューヨークのダ・カーポ出版からフォトコピーの形でリプリントされた。リーベスキントが編集者となっている。最新版はリーベスキントを編曲者に冠し 2005 年にミュンヘンのヘーフリッヒ社から出版されている⁹。ディッターズドルフの研究者でもあったリーベスキントが、“シュトラースブルク風舞曲”という楽章を発見し、その一部分のメロディでもモーツァルトのヴァイオリン協奏曲と合致しないかと血眼で照合した結果「全 7 曲中の 1 曲 [K.218] からのみ ... そのような部分が発見された」ため、K.218 が ‘シュトラースブルガー’ であろうと思い込んでしまった気持ちは分からないでもない。そのような箇所を追体験してみよう。



図 5 ディッターズドルフ シンフォニー《仮装舞踏会》第 4 楽章シュトラースブルク風舞曲第 14 小節後半 - 第 18 小節前半

図 5 が K.218 の第 136 小節以降と小節割およびメロディにおいて類似していると言えなくもない。第 15 小節の八分音符のメロディはこの楽章でこの小節だけに出てくるものであり、かつ K.218 との類似を特徴付ける音形である。しかし楽譜を示されない限り気が付かない類のものであり、経過部分と主題復帰部分に跨った半端な箇所である。モーツァルト父子は ‘シュトラースブルガー’ と言えば誰もが知っているメロディを引用したに相違なく、この部分ではその前提を満足しない。また最も重要なことであるが、リーベスキントの言うようなミュゼット音を使用していない¹⁰。それゆえリーベスキントが当時出版したばかりの楽譜の該当部分を論文に載せなかったのは反則にも等しい行為と言ってよいだろう。以後の歴史を辿ってみれば如何に罪作りな伝統を作ってしまったかが分かっていこうというものである。

(2) アーベルトによるリーベスキント説の支持

ヘルマン・アーベルトは『W.A.モーツァルト』(1919/21)において：「協奏曲集の最後の 3 曲 (K.216、218、219) のフィナーレで驚くべき局面は、それらが含んでいる紛れもない民俗音楽的な傾向である。基本的にその驚きはフランス風であるがそれらが導入されている方法が示すところでは昔のオーストリア風組曲の精神をいくらか暗示しており、一方でモーツァルトのテンポ変化への好みは異なった民謡のメロディを実際に併置していた昔のクオドリベを思い起こさせるものである。K.216 のフィナーレにおけるアレグレットのエピソードは明らかに古いドイツの民謡に基づいている (脚注：これは『ウィルヘルムス・ヴァン・ナッサウウエ』¹¹にまで辿ることができる典型的なものである)。また、K.218 のミュゼット主題の後ろには手紙で言及された“シュトラースブルガー”が隠れていると思われる (脚注：リーベスキントは二長調協奏曲 (K.218) のエピソードの後半がディッターズドルフの謝肉祭交響曲のシュトラースブルグゼ舞曲と呼ばれるミュゼットと類似しているとしている)。」¹²と述べている。

K.216 がドイツの民謡に基づいているというのはアーベルトの独自の指摘であるが、K.218 もミュゼット主題を含んでおりその点ではフランス風であること K.218 と何ら異ならないのである。ただ、アーベルトが感覚的に K.216 をドイツ風だと捉えたということであれば、正鵠を射ていると言えるであろう。シュトラースブルガー舞曲はその成立経緯からフランス風でもありドイツ風でもありうるからである。また、K.216 のミュゼット音はモーツァルトが追加したものであるということを知らずしてそう言っているからでもある。

しかし、リーベスキントに比べ段違いに大きな力を持ったアーベルトの著作で K.218 説が一気に広まってしまった広告塔の役割には非難がなされなければならない。

(3) ケッヒェル目録におけるリーベスキント説の支持

アルフレート・アインシュタイン (Alfred Einstein) はケッヒェル第 3 版 (1937) で「J.リー

ベスキント（音楽ビジネスと音楽保護 1908）が K.218 のロンドのミュゼット（バグパイプ）風な主題とディッターズドルフの謝肉祭交響曲のシュトラースブルグ舞曲と呼ばれるミュゼットとの類似に注意を向けたので、『シュトラースブルグ協奏曲』が K.218 のみを意味することは疑いの余地がない^{注13} と言い詳細な議論は行っていない。第 6 版にもこの文言が残っている。ミュゼットとの類似が K.218 のみを意味し、K.216 が排除されるという論理はアーベルトの受け売りであり、どんどん矛盾がエスカレートしていく様が手に取るように分かる。

(4) アインシュタインによるリーベスキント説の支持

アルフレート・アインシュタインはさらに『モーツァルト その人間と作品 (Mozart. Sein Charakter, sein Werk)』(1945)(邦訳：浅井 真男 白水社、1961 年)で：「二長調の曲は前作のト長調の曲と非常に異なっている。音響の点でずっと感性的なのであるが、このことは、より輝かしい調性を使ったせいだけではなく、疑いもなくこの曲でモーツァルトが追求している模範のせいでもある。模範とは十年ほど早いポツケリーニのヴァイオリン・コンチェルトである。[中略]アンダンテ・《カンタービレ》は実際ヴァイオリンのたえまない歌であり、愛の告白である。そしてロンドは、第三曲におけるように再び二、三の滑稽なエピソードを挿入することによって、イタリア的なものをフランス的なものと融合している。このエピソードは聴衆によく知られていたもので、モーツァルトが書簡の中で、『シュトラースブルクもの』として数回言及しているガヴォットとミュゼットである。」^{注14} (その後ポツケリーニの曲は 20 世紀の慣作であることがわかり関連は否定された。)

(5) 書簡全集におけるリーベスキント説への言及

書簡全集の注釈(1971)の 1777 年 10 月 6 日のレーオポルトからの手紙に関する注の欄には「[シュトラースブルグ付きの協奏曲は]ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 である。K.218 のロンド楽章に出てくるミュゼットふうのテーマが、ディッターズドルフの《謝肉祭あるいは仮装舞踏会 (Carneval ou La redoute) 交響曲》の中のシュトラースブルク風舞曲と題されたミュゼットと類似している」^{注15} とされた。(原著のみ。邦訳は後述)

(6) 属啓成著『モーツァルト』によるリーベスキント説の支持

属啓成氏(1975)は K.218 の解説において「リーベスキント (J. Liebeskind) によってこの協奏曲の終楽章に、ディッターズドルフの“謝肉祭交響曲”の中の“シュトラースブルク舞曲”と書かれたミュゼットと、非常に似た主題を使用している事実が指摘されて以来(1908 年)、この協奏曲がそのシュトラースブルグ協奏曲であることが明らかとなった。」^{注16} と述べており、また、K.216 の方は「ドイツ民謡風なアレグレット主題」と述べていることから、アーベルトの引用であることが推測される。

(7) 『モーツァルト全集 第 5 巻』(小学館)での言及

『モーツァルト全集 第 5 巻』(1991)では K.218 のロンド楽章に出てくるミュゼットふうのエピソードが、ディッターズドルフの謝肉祭交響曲の中のシュトラースブルグ舞曲と題されたミュゼットと類似しているとの指摘を誤ってアインシュタインの説であると紹介している^{注17}。無理もないことと言わなければならない。アインシュタインが上記(4)項の『モーツァルト その人間と作品』においてリーベスキントの名前を出していないための混乱であるからである。

(8) 『ディッターズドルフ：オーケストラ作品集』での言及

フィリップ・ブルックスは 2005 年出版の『ディッターズドルフ：オーケストラ作品集』の序文で「シュトラースブルク風舞曲楽章はモーツァルトのヴァイオリン協奏曲 K.218 の一部と明らかに類似している」^{注18} と述べているが、リーベスキントと同様どの部分が相当するののかについては全く触れていない。寧ろ楽譜を目の前にしてすら該当部分が分からなかったのであろう。

2.3 レヴィツキの説 (K.271i)

(1) E. レヴィツキのドレスデン新聞 (1907) における議論

E. レヴィツキはドレスデン新聞 (1907)^{注19} において当時新たに発見されたヴァイオリン協奏曲 二長調 K.271a (271i) がそれではないかという議論を提起した。

(2) アーベルトによるレヴィツキの説の紹介

ヘルマン・アーベルト (Hermann Abert) の『W.A.モーツァルト』(1919/21)の注釈にレヴィツキの説が挙げられている^{注20}。レヴィツキの論文を直接参照できず、アーベルトの情報源のみであるため、どの主題について述べているのが筆者には不明であるが、ヴァイオリンソロの出だしの民謡風フレーズを図 6 に挙げておく。



図 6 モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.271a (271i) フィナーレ 第 61 - 76 小節

2.4 近年の首を傾げたくなるような解説

(1) 邦訳書簡全集 II

邦訳書簡全集 II (1987) は原著の書簡全集とは異なった注釈となっており「[シュトラースブルガー付きの協奏曲は] ヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218。ト長調がこの《シュトラースブルガー》と考えられていたこともある」^{注21} という説明をしている。この説は筆者の手元にある海老澤敏著『モーツァルト 改訂』音楽之友社 (1985) でも述べられており：「《ストラスブルク協奏曲》(第 3 番と第 4 番のどちらをこう呼ぶかについて論議もあったが、最近では第 4 番の方に与えられている)」^{注22} となっている。順序が逆とも思えるこの論議において、「最近」という言葉に惑わされてはいけない。この記述は四半世紀前に出版された海老澤敏著『モーツァルト』初版で既に述べられていたからである (文章は全く同じである)。冷静に考えれば、「最近」とは 1908 年のことで、それ以前はヤーンが K.216 と K.218 を併置していたということを言っているのである (ここから海老澤氏がヤーンについては初版を参照していたことが分かる)。

(2) 『モーツァルト大事典 (The Mozart Compendium)』

ロバート・レヴィンは『モーツァルト大事典 (The Mozart Compendium)』(1990) で：「[K.218 が] いわゆる《シュトラースブルク協奏曲》と考えられているが、研究者によっては K.216 がそれだと言うものもある。」^{注23} と 1990 年の解説としては非常に優柔不断であり手抜きである。

2.5 近年の良心的な解説

(1) 『モーツァルト全作品目録 IV』(中央公論社)

モーツァルト研究所編の『モーツァルト全作品目録 IV』中央公論社 (1977) は恐らく日本で初めて K.216 説を紹介した：「D. Bartha はフィナーレの中間部のアレグレット主題が《シュトラースブルク協奏曲》なる古い民謡旋律とほとんど同一のものであるため、K.216 の方を《シュトラースブルク協奏曲》であろうと結論している。」^{注24}

この目録はケッヒェル 6 版の体裁をとっているが、できるだけ新しい内容に書き直すことをモットーに新全集の情報を採り入れて編集していることが特徴であった。しかもこの情報については下記新全集を先取りしている。筆者が今でも重宝している所以である。

(2) A・ハイヤット・キング著『モーツァルト/管・弦協奏曲』

ハイヤット・キングはその著書 (1978) で「最近の研究では [アレグレットの] 2 つの部分の調べは《シュトラースブルク協奏曲》として知られるハンガリーの民謡であると確定された。それ故に《シュトラースブルク協奏曲》として確認されるべきものは、このト長調の協奏曲であり、従来言われてきた二長調 (K.218) ではないことが分かる。」^{注25} と述べている。「ハンガリーの民謡」というのは限定しすぎではあるが。

(2) スタンレー・セイディー著『ザ・ニュー・グローヴ・モーツァルト』

セイディーはその著 (1980) で次のように述べている：「K.218 と同様、これら [K.216 と K.218] 二つの協奏曲は共通の特徴があるフィナーレを持っている。洗練度の差こそあれ、テンポの変化や拍子が変わり、宮廷舞曲や民俗主題が含まれる (とりわけ K.216 においてはモーツァルトが「シュトラースブルク協奏曲」と呼んだことで起源が想定されるミュゼット風のメロディ; バルタ 1956 参照)。」^{注26} K.216 を正しくミュゼット風と言っているのは初めてではないだろうか。

(3) 新全集

新全集 NMA V/14/1 (1983) の序文では：「どの自分のヴァイオリン協奏曲を指してモーツァルトがシュトラースブルク協奏曲といったのかの疑問に対して確定的な回答はできない。伝統的な意見が K.218 にこのニックネームをカバーしたのに対し、デーネシュ・バルタは正当な理由をもって K.216 への注意を喚起した。」^{注27} としている。

(4) モーツァルト全作品事典

ニール・ザスローは『モーツァルト全作品事典 (The Compleat Mozart)』(1990)の K.216 の解説で次のように述べている:「この陽気な旋律は、バルタの研究によれば、モーツァルトの時代に“シュトラースブルガー”という題名で知られていた歌である(残念なことに、再発見されたのは旋律だけで歌詞は判明していない。歌ではなく舞曲だったのかもしれない)」^{注28}

ザスローが「舞曲だったのかもしれない」と言った 1990 年には既にライヒャルト(1984)が博士論文でエコルシュヴィルによる手稿曲首カタログ中にモーツァルトのト長調協奏曲とほとんど同じメロディを持つ舞曲メロディを発表していた。新しい説が浸透しない理由は、従来のモーツァルト研究の発表の場とは異なるところで議論されていたからなのかもしれない。

(5) モーツァルト事典

渡辺千栄子氏は『モーツァルト事典』(1991)で「[シュトラースブルク協奏曲は]かつては第 4 番と考えられてきたが、近年第 3 番の第 3 楽章のアレグレットの旋律が“シュトラースブルガー”と呼ばれる民謡とほとんど同じであることがわかり、この第 3 番こそ『シュトラースブルク協奏曲』であるとする説が有力になっている」^{注29}と述べている。

(6) 作曲家 人と作品シリーズ モーツァルト

西川尚生著『モーツァルト』(2005)はこう書いている:「ト長調協奏曲(K.216)では[中略]第 3 楽章に、“シュトラースブルガー”の名で知られる古い旋律の引用がある。そのためモーツァルトは書簡のなかで、この曲を“シュトラースブルク協奏曲”と呼んでいる^{注30}。西川氏は誰の説を採ったのか明示していないが、舞曲としていないところから見るとザスローと同様バルタの説に基づいているものと考えられる。

(7) 書簡全集

書簡全集付録(2005)でようやく注釈が改訂された:「“おまへのシュトラースブルガー付きの協奏曲”は K.218 ではなく K.216 である。アーダム・ホルヴァート・フォン・パローツによる約 360 曲のメロディと 450 曲の歌詞の広範なコレクション(1813)(デーネシュ・バルタの批判版は 1953 年)によれば 1788 年に既に『ある歌詞不明の歌曲、シュトラースブルガーを心覚えに』というメロディがあり、K.216 フィナーレのロンドのエピソードに一音一音忠実に一致している。バルタによればそのメロディはハンガリーで(そして恐らく中央ヨーロッパのどこかでも)1788-1789 年に非常にポピュラーであり一介のディレッタントが替え歌用に“シュトラースブルガー”を使ったものであろうということである」^{注31}

1997 年にはダームスが、1999 年にはライジンガーが既にシュトラースブルク舞曲の楽譜を示しているのではあるが、今のところ引用している邦文の文献はないものと思われる。従って原曲が舞曲であると断定しているものもないのではなかろうか。CD の解説書などがどうなっているのか。論文を読んで解説を書いている人は少数派であるが皆無ではないので見落としているかもしれない。失礼にならないうちに調査はこの辺でとどめておく。

3. まとめ

長らくシュトラースブルク協奏曲がヴァイオリン協奏曲 二長調 K.218 であるとされた経緯について調査結果を示した。仮説は偽りと紙一重であり、第三者の追跡調査が可能でなければ嘘となってしまうこともあると十分に認識し発言に留意するように心掛けたいものである。

注:

注 1: Otto Jahn: W.A. Mozart. Erstdruck: Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1856 (Bde. 1/2), 1858 (Bd. 3), 1859 (Bd. 4). Bd.1 S. 604. (グーグルブックでキーワード“Mozart Jahn 1856”にて閲覧可能。或いは Zeno.org Meine Bibliothek で閲覧可能)

注 2: モーツァルト研究所編『モーツァルト全作品目録 年代順主題解説 IV、1775-1777』中央公論社、1977 年、p. 25-6。

注 3: 『モーツァルト全集 第 5 巻』、小学館、1991 年の國安 洋氏による解説、p. 205。

注 4: Otto Jahn: W. A. Mozart. Zweite durchaus umgearbeitete Auflage. : Leipzig: Breitkopf & Härtel. 1867. Bd.1 S. 324. (グーグルブックでキーワード“W. A. Mozart Straßburger”にて閲覧可能)

注 5: Otto Jahn, translated by Pauline D. Townsend: Life of Mozart with a preface by George Grove. New York; Edwin F. Kalmus, 1882, p. 318-19.

注 6: Ludwig Schiedermair: Die Briefe W. A. Mozarts und seiner Familie. 5 Bände, Band 3. München/Leipzig 1914, S. 208. (Zeno.org Meine Bibliothek で閲覧可能)

注 7: Hermann Abert; W.A. Mozart. Neubearbeitete und erweiterte Ausgabe von Otto Jahns Mozart. Leipzig 1919/21, p.425. (Zeno.org Meine Bibliothek で閲覧可能)

注 8: Musikhandel und Musikpflege 9 (1908). Nr. 1/2 (16. Januar), S. 8. (本稿では Ulrich Leisinger:

Mozarts "Straßburger-Konzert" KV216 in Acta Mozartiana 1999.12, V.46, Nr.3/4. p. 108 – 112. の論文に記載の先行論文要約から引用した)

注 9 : Ausgewählte Orchesterwerke von Carl Ditters von Dittersdorf, Leipzig: Gebrüder Reinecke, 1899-1904. フォトコピーによるリプリント版が Selected orchestral works / edited by Josef Liebeskind, New York : Da Capo Press, 1971. 上記から 6 曲の交響曲《オウィディウスの変身》を除いた 5 曲が 2005 年に C. D. von Dittersdorf; Orchesterwerke (Repertoire Explorer, Study Score 452)として München の Höflich 社から出版されている。

注 10 : ディッターズドルフの " シュトラースブルク風舞曲 " 楽章でミュゼット音が使われていると言えなくもないのは以下の部分である :



図 7 ディッターズドルフ シンフォニー《仮装舞踏会》第 4 楽章シュトラースブルク風舞曲第 25 - 32 小節

さらにこの部分が K.218 の第 126 小節以降 (図 4 を参照) と似ていると言えなくもないが、いずれにせよこじ付けの域を出ない。

注 11 : オランダの国歌でもある Wilhelmus van Nassouwe は元々中央ヨーロッパ、特にオランダ及びドイツの民謡であった。4 分の 4 拍子に 4 分の 3 拍子が混在している。(<http://abcnotation.com>)



図 8 ウィルヘルムス・ヴァン・ナッサウエ

なお、モーツァルト研究所編『モーツァルト全作品目録 年代順主題解説 I、1761 - 1769』中央公論社、1976 年、p. 44 の『<ヴィレム・ヴァン・ナッサウ>による 7 つの変奏曲 二長調』K.25 の解説中でも「この歌曲の主題は [中略] ヴァイオリン協奏曲 K.216 においても、テーマの類似が言われている」と述べている。

注 12 : 注 7、p.425 を参照。

注 13 : Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts.

注 14 : Alfred Einstein: Mozart. Sein Charakter, sein Werk. Entstanden 1945. Erstdruck: Stockholm (Bermann-Fischer) 1947. S. 323. アルフレート・アインシュタイン著、浅井 真男訳『モーツァルト その人間と作品』、白水社、1961 年、p. 382。

注 15 : W. A. Bauer / O. E. Deutsch / J. H. Eibl (hrsg. von): Mozart. Briefe und Aufzeichnungen. Gesamtausgabe, 8 Bde., Bärenreiter, Kassel etc. Band V. 1971. S. 389.

注 16 : 属啓成著『モーツァルト III 器楽篇』、音楽之友社、1975 年、p. 502。

注 17 : 『モーツァルト全集 第 5 巻』、小学館、1991 年の國安 洋氏による解説、p.206。

注 18 : 注 9 を参照。

注 19 : E. Lewicki, Dresdener Anzeiger vom 16. Juni 1907 und Mk 1907, 2. Novemberheft.

注 20 : 注 7、p.425 を参照。

注 21 : 海老澤敏・高橋英郎編訳『モーツァルト書簡全集』全 6 巻、白水社、1976 年～2001 年、p. 98。

注 22 : 海老澤敏著『モーツァルト(大音楽家人と作品 3) 改訂』、音楽之友社、1985 年、p.173。初版は海老澤敏著『モーツァルト(大音楽家人と作品 3)』、音楽之友社、1961 年、p.173。

注 23 : ロビンズ・ランドン監修/海老澤敏日本語監修『モーツァルト大事典』、平凡社、1990 年、p. 177。

注 24 : Alec. Hyatt King: Mozart Wind & String Concertos, 1978, British Broadcasting Corporation. 大塚武彦訳『モーツァルト/管・弦協奏曲』、日音楽譜出版社、1982 年、p. 36。

注 25 : Stanley Sadie: The New Grove Mozart, 1980. p. 48.

注 26 : 注 2 を参照。

注 27 : NMA V/14/1: Violinkonzerte und Einzelsätze, Edition (Christoph-Hellmut Mahling, 1983).

注 28 : ニール・ザスロー編、森泰彦監訳『モーツァルト全作品事典』、音楽之友社、2006 年、p. 186 - 7。

注 29 : 海老澤敏/吉田泰輔監修『モーツァルト事典』、東京書籍、1991 年、p.427。

注 30 : 西川尚生著『作曲家 人と作品シリーズ モーツァルト』、音楽之友社、2005 年、p.243。

注 31 : MBA. Band VIII: Einführung und Ergänzungen. 2005. S. 84. 面白いことに編集者のウルリヒ・コンラートは DECCA の SACD からレナーテ・フェダーホーファー=ケーニヒスの解説を引用して注に充てている。

(2010 年 7 月 4 日作成、2010 年 10 月 2 日改訂)